

## 第4章 横川ダムを活用した地域活性化の具体的方向

これまで、横川ダム水源地域周辺の現状と課題、ダムを活かした今後のまちづくりへの可能性などについて検討してきた。本章ではこれらの結果を踏まえて、具体的なダム周辺地域での活動が、全体のまちづくりに効果的に連動して、本町の持続的な発展に寄与していくためにどうあればよいか、という視点から検討を進める。

本町は、「白い森構想」の基本理念を具現化していく戦略として、「白い森の国ふるさと文化村づくり」での5箇所の拠点整備地区と、それを横軸で支える三つの主要施策を掲げている。

そこで、横川ダム水源地域の活性化をまちづくり全体の中に位置付け、その活動をきっかけとしてまちづくりを進めていくという流れを、概念図として図4-1に示す。

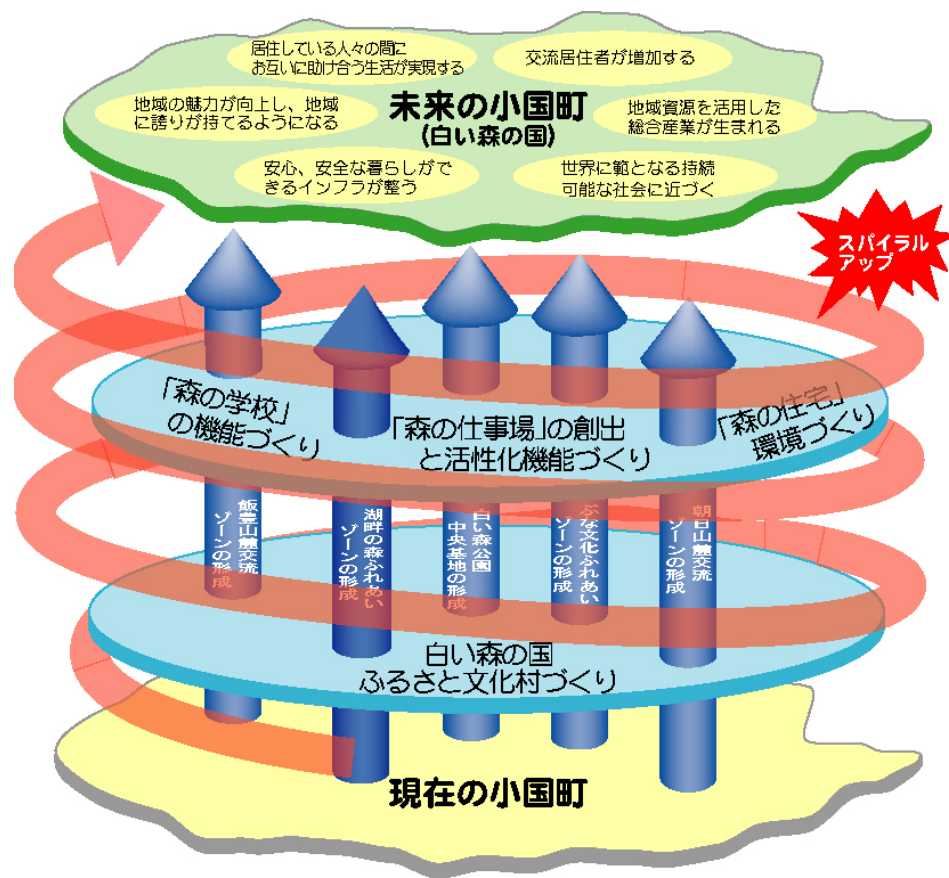


図 4-1 本町の戦略的まちづくりの流れ概念図

この図は、横川ダム周辺地区を中心とする「湖畔の森ふれあいゾーンの形成」をスタートとして段階的に向上していく図となっているが、まちづくり全体では、それぞれのゾーンからスタートする五重の螺旋構造にしていくことが基本である。そしてそれぞれが競争・協働しあいながら相乗効果を発揮していくことを目指している。

そこで、以下に水源地域ビジョンで具体的に取り組むべき方向性を検討する。

#### 4-1 ダム湖及び周辺資源を活用した多面的交流事業推進のあり方

ここではダム湖及び周辺資源について、いくつかの切り口からその多様性や高付加価値化への可能性を探ってみる。

一つ目は、ダム湖岸の場所自体が有する潜在的な可能性を引き出して多面的交流に活かす視点、二つ目は、四季が織りなす地域の自然と人の暮らしを活かした視点、三つ目は、ダム上流地域における集落間の連携協力体制の再構築の視点、四つ目は、ダム湖周辺資源を活用した地域活性化とまちづくりの視点、五つ目は、町全体あるいは町域を超えた流域交流の視点、の五つの視点から検討を行う。

##### 4-1-1 ダム湖及び周辺整備箇所を活用した交流事業推進の視点

横川ダム周辺整備として、四つの整備地区がダム湖及び湖岸に計画されている。具体的なハード面の整備概要は第2章の表2-1に示した。ここでは、それぞれの地区における可能な活動を通じて、いかに人と人とが活発に交流し、町の新たな観光や体験学習、豊かな自然との触れ合いなどに多面的な機能を発揮し得る拠点に育てていくかについて検討を行った。

表 4-1 ダム湖及び周辺整備箇所を活用した交流事業推進の視点

	場所		想定される取り組み	多面的交流を推進するための手法
計画されているダム周辺整備地区	ダムサイト地区	広報交流館	<ul style="list-style-type: none"> <li>・展示物等による防災意識の啓発、横川ダムの紹介、ダム周辺及び小国町の紹介</li> <li>・地域の人たちが企画する企画展の開催</li> <li>・地域の人たちによる交流活動や体験学習の継続的实施</li> <li>・貸し自転車の貸し出し</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ダム湖周辺地域へ行ってみたいと思わせるしかけを用意：例えばダム湖周辺の解説付魅力マップや、食や特産品、通年のイベント情報が盛り込まれたパスポート型冊子の配布、季節を先取りした写真展や東部地区のむらづくりの歴史企画展、横川流域の縄文遺跡企画展などを開催し Web での PR と結果の報告を継続して行っていく。</li> <li>・地元の人たちによる企画展の継続：企画展ではできる限り直接会話による解説を通して交流を図る。</li> <li>・「よこかわ水の駅」として他の水の駅や川の駅との連携交流：他の水の駅、川の駅などに案内リーフレット等を常備。合同イベントの開催など</li> </ul>
		展望広場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ダム本堤の眺望を利用した児童生徒の体験学習など</li> </ul>	
	市野々地区	大イチョウ広場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市野々に住んでいた人たちのシンボルとして新しいイベントの開催</li> <li>・横川ダムの象徴木としてPR</li> <li>・広場での芋煮会など町民が集って交流する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「東部地区ふるさとまつり」の復活：市野々に住んでいた人たちだけでなく、東部地区の人やゆかりのある人たちが年に一度大イチョウの下に集って、かつてむらづくりの一環として盛んだった「東部地区ふるさとまつり」を復活させる。</li> </ul>

		歴史街道を結ぶ不動出生橋	<ul style="list-style-type: none"> <li>・十三峠、黒沢峠の旧峠道の山歩き等における新たな結節点として案内板等を設置する。</li> <li>・水辺に近づくきっかけづくりとして、もぐり橋の存在をPRする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・古い歴史の峠みちと新しく生れた水のみちが出会う結節点の演出・黒沢峠まつりと湖面を活用したプログラムとを連動するイベントを開催する。</li> <li>・橋が水中にもぐる時期には、渡し船を使う：常時満水位での歴史街道を利用したイベント時には、船を利用して道をつなぐことで、新しいイベントとしての多様性を加え、PRしていく。</li> </ul>
		湿地・草地	<ul style="list-style-type: none"> <li>・湿性や草原生の生き物にふれあえる空間として、継続的に管理する。</li> <li>・既存の下葉水にあるビオトープと連携した管理や学習支援活動を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森林セラピー基地と連携できるサブ拠点として位置付ける：背後を山に囲まれ、前面には水辺が広がる「静」の空間を生かし、多様な自然の中で癒される安らぎの広場として、黒沢峠の散策等も加えたメニューの開発を行う。</li> </ul>
		流木荷揚場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・炭焼きや工芸、バイオマス利用などの、流木の多様な利用方法の実例を紹介する展示広場の併設や解説板等を設置。</li> <li>・炭焼き体験などのイベントの開催。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎年「流木美術・工芸展」などのイベントを開催：地域の伝統工芸などの展示や体験などの他のイベントと連携して開催する。</li> <li>・炭焼窯の設置による炭焼き体験と炭の多面的活用推進：町の環境計画とも連動して再利用システムをつくりあげる。</li> </ul>
下葉水地区		湿地・草地	<ul style="list-style-type: none"> <li>・広場利用を行うエリアと、自然植生や生き物の生息空間として保全するエリアを区分して管理を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地元のNPOが先行してつくりあげたビオトープと連携：水辺の生き物に出会える場、環境学習の場として活用できるプログラムを用意して地元だけでなく、都会の学校との交流にも活かしていく。</li> </ul>
		水辺	<ul style="list-style-type: none"> <li>・水位変動による裸地とならないよう植生に配慮する。（植生の復元には、在来種の活用を原則とする。）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・法面を裸地にさせない景観配慮のダムをウリとする：洪水時の制限水位と常時満水位の間の法面緑化技術の確立により、制限水位時期のダム湖の景観を醜くする裸地化法面を極力なくす。</li> <li>・経年変化を観察し、表土の浸蝕が発生する場所では、土木的な工法との併用によって植生の安定化を図る。</li> </ul>
上葉水地区		パークゴルフ場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多様な年齢層が同じコースで交流できる特徴を活かして世代間交流を推進する。</li> <li>・整備水準を上げて、評判の良いコース状態を維持することによって、リピーターや常連客を増やす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「白い森おぐに湖杯」など定期的なコンペの開催：パークゴルフ人口増加のため、年齢層別や地域別など多様な人々が参加できるしくみをつくる。</li> <li>・白川ダム湖畔のパークゴルフ場と連携したツアー競技を開催：白川ダム湖畔にも公認コースがあり、近隣同士で協力してパークゴルフによる交流と集客を図り、先進地として存在価値を示していく。</li> </ul>

		ゲートボール場・芝生広場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お年寄りや子供たちが安全で安心して利用できるよう配慮し、ベンチや緑陰樹などを配置する。</li> <li>・桜を植えてお花見広場としても活用。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の井戸端会議場を目指す：地域のお年寄りや子供たちがいつも集まれる楽しい交流の場とするために、地区の井戸端会議場的な居心地の良い空間にしていく。</li> </ul>
		花壇と親水部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・散水施設の有無と、維持管理水準によって、植栽する品種が限られるため、条件に合った取り組みを行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・花づくりの達人を競う：希望する地域の人たちに花壇をつくってもらい、毎年花の達人競技会で、優秀な技と美しさを競ってもらう。</li> <li>そして、その技を集落の緑花運動の指導に活かしてもらう。</li> </ul>
新規提案エリア	湖岸道路	桜並木	<ul style="list-style-type: none"> <li>・町の木であるオオヤマザクラを湖岸道路に植栽して花の回廊の拠点とする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・町民参加で名所づくり：苗木を植えても10年で名所になる。</li> <li>・経費をかけず、短時間でできる：苗木代と土壌改良費だけで支柱は不要、イベントとして町民や学校、企業、流域地域の人たちなどの参加で行えば短時間ででき、リピーターの数も増える。</li> <li>・今後、5つの文化村を結ぶ花の回廊として広げていく：この活動を横川ダム湖畔だけで終わらせることなく、全町の取り組みに広げていく。</li> </ul>
	湖岸の常時満水位以上の余裕地やダム周辺の耕作放棄地など	ヤマブドウやマタタビ、カシスの栽培	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ダム湖岸において、特産品づくりの一環として地域性に即したワインの原料を栽培する。</li> <li>・最近増加している耕作放棄地の活用として、上杉鷹山公が勧めた地域ごとの換金作物生産の教えを活かす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の自然の恵みからの特産品づくり：隣接の飯豊町では、コクワ（サルナシ）ワインを地域限定の特産品として販売しているが、本町でも、ダムの湖岸法面や耕作放棄地を活用してヤマブドウやマタタビの栽培を行って「白い森ワイン」を売り出し、山の幸、川の幸を活かした薬膳料理などとセットで売り出す。</li> <li>・広く苗木の所有者を募りその本数に応じたワインを年間契約で送る：耕作放棄地等を活用して生産し、全国から苗木のオーナーを募集して権利を販売する。</li> <li>リピート率の向上と、都市と農村の交流のきっかけづくりにするとともに、予約販売で生産量の目途を立てやすくし、売れ残るリスクを低減させる。</li> <li>・町独自の新しい産業を育てていく：地域性を活かしながら健康イメージをPRすることができる食品産業の創出を図る。</li> <li>・カシスを使った新しい特産品の開発に取り組む。</li> </ul>

<p>市野々地区 町道横川ダム湖岸線付帯町有地</p>	<p>流木などのバイオマスをエネルギー利用したハウス施設</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・流木荷揚場からの流木や、周辺の里山管理、遊歩道管理で発生した木質バイオマスをハウス栽培用にエネルギー利用することによって、通年出荷が可能な農・園芸作物の生産が可能になる。</li> <li>・また、未利用バイオマスを有効活用し、資源循環やCO2の排出削減にも貢献できるモデル施設となる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然エネルギー利用をまちづくりの柱に据える：町が計画している未利用バイオマス利用による地域暖房と連動させて、地域特性を活かした自然エネルギー利用をウリにする。</li> <li>・雪の冷熱エネルギーを利用した農産物の出荷抑制や、旨味づけなどと組み合わせる：本町にとって雪を活かしたまちづくりは欠かせないテーマである。森に暖められ雪に冷やされるエネルギー利用は、未来の小国をアルカディアにできる貴重な資源である。雪室の実現を目指す。</li> <li>・これに本ダムの水が生み出す水力発電のエネルギーを加えれば、ポスト化石燃料時代の最先端地域となる。</li> </ul>
---------------------------------	----------------------------------	--	---

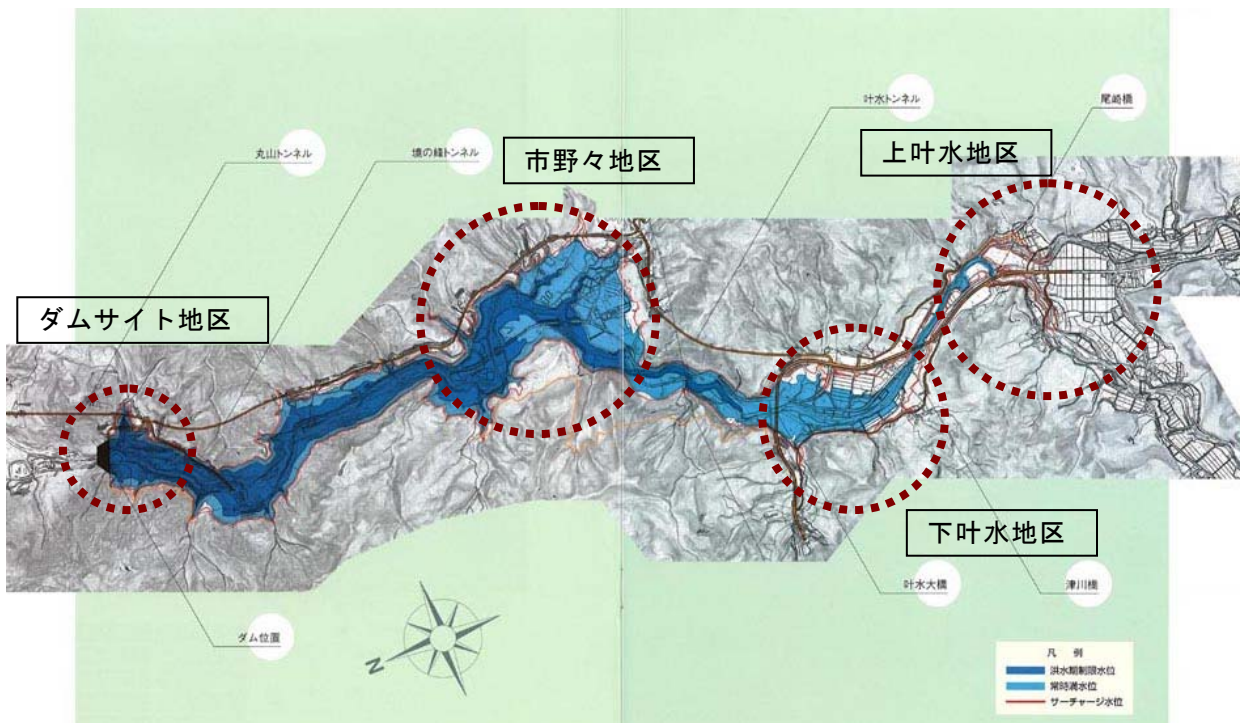


図 4-2 ダム湖岸整備地区位置図

#### 4-1-2 四季が織りなす地域の自然と人の暮らしを活かした交流事業推進の視点

ダム湖周辺地域の自然が季節によって大きく変化することに着目し、四季の劇的な移り変わりを資源とし、また、それぞれの季節に繰り広げられる地域の人々の暮らしの中の年中行事や祭りなどを交流事業に活かしていく視点で検討した。

表 4-2 四季が織りなす地域の自然と人の暮らしを活かした交流事業推進の視点

季節	季節の特徴		特徴を活かした交流事業の推進
	自然	主な年中行事や祭り等	
春	<ul style="list-style-type: none"> <li>・山全体が白黒の世界から鮮やかな色彩に劇的に変化する時で、ブナの若葉が一斉に萌え始める。</li> <li>・野山では短期間の間に草花が一斉に咲き乱れ、まさに一時の春の妖精たちである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・春は農作業に関する行事が中心となる。</li> <li>・当地区には、わらび園が5ヶ所あり、野焼きは春の風物詩となっている。</li> <li>・山菜採り</li> <li>・山菜の保存技術</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3月、早春の雪の固まった頃に、現在も町内五味沢地区では「雪の学校」が開催され、ブナの森ハイキングなど早春の自然観察会で都市の子供たちや家族との交流が図られている。ダム上流地域でも、横川ダム工事事務所の主催で雪上山歩きによる動物の足跡探しなどの体験会がNPOの協力で催され、成果を挙げていることから、今後の都市との交流などに期待できる。</li> <li>・5～6月には町内大滝、五味沢地区で「山菜の学校」が開催され、山菜採りや山菜料理などが学べる交流会が実施されている。ダム上流地域は、最もわらび園が多い地域でもあり、今後のプログラムに加えたい。特に山菜採りのマナーや保存の仕方を現場で教えることは重要。</li> <li>・ダム上流地域にも森林・登山ガイドを行う方がいることから、自然観察や自然体験学習などは年間を通じて初心者から経験者まで十分対応可能プログラムを用意できる。</li> <li>・ゼンマイに代表されるような採る技術・選別する技術・ゆでる・もむ・・・、それぞれの山菜の特性に応じた保存の技術を伝える。</li> </ul>
夏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森は緑を増し、原生のブナ林を中心とする山々は、多様な生き物を育む。人々が多様で豊かな自然に触れることができる季節である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・虫送り</li> <li>・盆行事と盆踊り</li> <li>・カジカとり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夏はダム湖や湖岸の水辺は利用適期となり、観光レクリエーション目的の人たちで賑わうことが予想される。これらの人たちがリピーターとなって何度もこの地を訪れ、地域の人々と交流が生れることが望まれる。</li> <li>特に今後、これらの人々の中から、この地域の自然を愛し、地域の人々と親しく交流でき、集落の共同作業にも協力できる交流居住人口を増やしていくことが、ダム上流地域の活性化につながる一つの方法である。</li> <li>・滝川上流のカジカ滝で行われている独特の漁法の伝承などを盛り込んだプログラムの実施。</li> </ul>
秋	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ダム湖周辺の山々が紅葉に染まり、水面に映えて、単彩色に変わる前の最も美しい色彩の時。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・稲刈り</li> <li>・秋祭り</li> <li>・芋煮</li> <li>・きのこ採り</li> <li>・保存食づくり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ダム上流の大石沢では今年からきのこ園が開園する予定で準備が進んでいる。わらび園利用者の多くがきのこ園を利用する可能性は高く、今後の入込みが期待されている。</li> <li>・マスずし、キノコの塩漬けや乾燥による保存、納豆ねせや大根漬けなど、冬に向けた保存食づくりを伝承する。</li> </ul>

冬	・音も色彩も消える白の世界。時には 3m を超える積雪に見舞われ、全てが雪に埋もれる。	・小正月の鳥追 い ・雪の学校	・都会の人にとっては深々と雪が降り積もる情景を見ているだけで、癒しや気分転換となる。何もない白い空間を価値ある空間に変えることは十分可能である。 ・冬の生活はどういうものなのか？衣食住のあらゆる場面で発揮されてきた雪国山村の知恵を伝える。 ・バイオマスエネルギーを利用したハウス栽培による農業の多様化を促進する。
---	---	-----------------------	--

#### 4-1-3 ダム上流地域における集落間連携・協力体制の再構築の視点

ダム建設による市野々や下叶水の移転によって、旧東部地区はダム湖上流地域を残すのみとなった。かつて、幾多の豪雪や水害の苦難、奥地集落の集団移転など厳しい環境をのむと、東部地区は地域づくりに積極的に取り組み、昭和 58 年に全国農林水産祭において、むらづくり部門の天皇賞に輝いた。

あれからほぼ四半世紀が過ぎ、社会経済状況の変化やダム建設工事の着工、付け替え道路の完成による町中心部との時間距離の大幅な短縮などによって、ダム上流地域の環境は大きく変貌した。

同時に、集落人口も減少が続く中、それぞれの集落機能も 2-1-2 に示したように共同体としての活動や集落行事の継続が困難になりつつあるのが現状である。

そこで、ダムの完成に伴ってできるダム湖や水辺を軸に、6 つの集落がゆるやかに連携した活用事業に取り組みながら集落機能の再構築を目指すという視点から、今後の集落間連携協力のあり方を検討した。

表 4-3 ダム上流地域における集落間連携・協力体制の再構築の視点

集落間の連携協力が必要な理由	現状における課題	集落機能や集落間連携の再構築に向けての方策
ダム湖周辺施設の運営管理等への参加協力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人口減少や高齢化が進む中、現状のダム上流域の全集落が協力し合っても、地域住民だけで全ての対応は難しい。</li> <li>・ダム関連施設の管理運営のほか、この地域全体の魅力向上のための独自の企画運営が持続的に実施される状況をどう創り出すかが課題。</li> <li>・現状では、中心的組織が定まっていなため、情報の集約化難しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ダム上流地域の活性化のためには、この機会を利用し、活動目的に応じて、地域外の人たちとの連携を推進していくことが必要である。</li> <li>・また逆に地域外のグループが、ダム湖周辺で活動する機会も増えると予想されるため、それらのグループとの連携も積極的に進める。</li> <li>・地域住民が協力しやすい組織体制を確立する</li> </ul>
減退傾向にある集落機能の改善	<ul style="list-style-type: none"> <li>・集落機能の減退がこのまま続けば、各集落存亡の危機に陥る可能性がある。これまでは、共有財産区等の管理もあって、あくまで各集落は独自の共同体制を守ってきたが、今後は、可能なものから集落間の相互協力による共同実施に切り替えていく必要が生じている。</li> <li>・これまで集落が担ってきた、公(行</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ダム湖周辺施設の運営管理への参加は、その新しい集落間協力への大きなきっかけになる。</li> <li>・集落機能が果たしてきた中間的な公共性の領域は、共同生活を行う上での重要な作法であることから、国が推進している交流居住(あるいは二地域居住)人口などの増加を図る場合も、無原則的に受け入れるのではなく、集落の共同作業へ</li> </ul>

	政)と個(個人あるいは家族)の間 の中間領域の共同作業が、このま まだと、公と個にその負担が振り分 けられる可能性が大となる。	の参加が可能であることを条件にする などの対策が必要。 ・どうしても維持が難しい機能につ いては公と個に二極化させない、集 落の合意による新しい体制づくり の検討が必要。
新たなまち づくりへの 再スタート	・かつてむらづくりで天皇杯を受賞 したほど活発だった地域であるが、 現在はその頃の活気はなくなっ ている。 ・人口減少と高齢化が進み、相対 的に若い人が少なくなっている一 方、大石沢では転入者の増加によ って一旦減少した人口が増加に 転じている。	・豊かな周辺の自然、縄文時代から 自然と共生してきた人々の暮らし、 叶水の基督教独立学園の立地と その歴史などに、ダム湖という 新しい環境を加えて、特徴ある 体験学習や環境学習の中心地 として、また癒しや健康回復の 基地として、ダム上流地域の 集落が連携協力して、まち づくりの再スタートを切る チャンス到来である。

#### 4-1-4 ダム湖周辺資源を活用した地域活性化とまちづくりへの視点

次に、ダム湖を中心として、来訪者が比較的簡単に行くことができる周辺の資源に光を当て、本町がまちづくりの骨格に位置付けている「白い森の国ふるさと文化村づくり」の5つのゾーンの中の当該エリア「湖畔の森ふれあいゾーン」の形成」を具体的に進めていく推進力としていく。

表4-4は主な資源をどう活かして「湖畔の森ふれあいゾーン」の機能の向上を図っていくかについて検討を行った。

表4-4 ダム湖周辺資源を活用した地域活性化とまちづくりへの視点

エリア		想定される取り組み	多面的交流を推進するための手法
黒沢峠や桜峠など越後街道十三峠の歴史街道の整備と活用	黒沢峠	・十三峠の中では最も活発な取り組みがされており知名度も高い。今後は保存会の活動を支援しながら保全整備を進めるとともに、他の峠をつなぐ活動に発展させる。 ・旧道が現道と交わる所や横川ダムの不動出生橋のように河川等と交わる場所を結節点としてメリハリをつけ、通り道としての旧道は極力昔の面影を保全する。	・歴史街道の全国ネットワーク化を働きかける。：横川ダムの完成を契機に、越後と米沢を結ぶ歴史と文化の街道に光を当て、直江兼続やイザベラバードなどのゆかりの人物を冠にした街道歩きイベントを開催し、各地の歴史街道歩きのイベントとも連携して、歴史街道の全国ネットをつくって交流を図る。 ・セラピーロードとしての活用を図る：登山道とは違って比較的標高差も小さく中高年でも安全に歩けるため、セラピーロードとして、温身平の森林セラピー基地活用の多様化を図る。
	桜峠	・市野々が湖底に沈むことによって黒沢峠と桜峠の間にダム湖が位置し、新たに不動出生橋によって結ばれることになった。 これに伴って、黒沢峠と桜峠の歴史街道を連続して歩くきっかけができ、新しい魅力付けが期待される。	・黒沢峠と桜峠の起点・終点の魅力付けを行うとともに、さらに白子沢から旧街道を回って周遊できるルートの開発を行う。市野々側には旧道が部分に残されていることから、その復元を行っていく。：横川ダム拠点整備地区の市野々地区を起点として多様な歴史街道の利用ができるメニュー開発も同時に行う。 ダム湖汎の市野々地区では、駐車場や広場を離合集散の場として活用できるため、団体での交流も可能となる。



	萱野峠 (ダム周辺地区ではないが参考事例として)	・この峠でも最近峠道の敷石を掘り起こすイベントが企画され、まちづくりグループが活動を始めている。	・石畳の道復元活動そのものを通じて、広く全国にイザベラバードの足跡を尋ねる歴史街道を宣伝する。: 他の同様な活動団体との交流を通じて活動への相互参加や地域間交流を推進するきっかけづくりとする。
越後街道と以前に越後と米沢を結んだ中津川街道の整備と活用	中津川街道、越後街道	・全ルートの整備でなくても、歴史街道の趣を残す要所については復元を図り、新街道とともに歴史街道探索や、山歩き、セラピーロードとして活かす。	・旧街道復元を継続イベントとして実行: 全国から参加者を募って、復元作業のボランティアに参加してもらい、地元の人たちと交流をしながら、継続的なつながりをもった活動にしていく。 ・新旧歴史街道にある石碑や道標・地蔵、シンボルとなる大木などをチェックしていくウォーキングラリーの開催: 横川ダムの市野々地区の大イチョウを起点終点として毎年開催、時代衣装での仮装や開催当日には各峠に峠の茶屋を出店するなど、参加者も参観者も楽しめるイベントとして育てていく。また、観光客の参加も増やしていくよう、広報交流館でのPRやWeb情報を活用する。
旧滝集落周辺の耕作放棄地の活用と横川上流部の滝や溪流の保全と活用	ダム上流地域の耕作放棄地	・旧滝集落やダム上流域の耕作放棄地をヤマブドウやマタタビ、カシスの生産農園として活用し、特産品としてワインづくりを行う。	・飯豊山や溪流の自然景観と、ヤマブドウやマタタビ、カシスなどの栽培風景の調和した桃源郷を目指す。: 契約栽培者が別荘感覚で利用できる宿泊施設の整備や、耕作放棄地の貸し農園的な再利用も含めて検討する。
	かじか滝、白滝、横川源流部	・かじか滝、白滝の景勝と溪流を保全しながら、観光や癒しのスポットとして活用する。	・カジカ料理、カジカに関する特産品の開発: 飯豊山麓交流ゾーンではイワナの寒風干しが特産品となっている。当ゾーンではカジカに関する商品開発を行い、町の特産品として例えばイワナとカジカの寒風干しをセットにしてPRするなどの取り組みを行う。
主要地方道川西小国線(九才峠)の改良	九才峠、白川ダム	・白川ダムとの多様なイベント連携が可能であり、先進地として学ぶべき取り組みも多い。	・スポーツ関連行事の共同開催: まず、マラソンや自転車ロードレース、パークゴルフ大会、ボートやカヌー競技などの共同開催から連携を始め、源流の森の「森の学校」などの体験プログラムの連携や、夏の雪まつりの共同開催などに広がっていく。
飯豊山信仰登山道の維持保全と活用	旧滝地区を含むダム上流地域	・飯豊山信仰の登山口としてルートの整備や管理を行う。 ・信仰登山の歴史的な史実や史跡に光を当てる。	・飯豊山信仰登山基地としての知名度を高める: 地元の山岳ガイドが同行する登山の楽しさを体験できるプログラムの実施や特徴ある地元農家民宿などとの連携を図る。 ・ルート上の見どころマップの作成: 信仰登山の歴史を物語る史跡や、季節の花、眺望点など、魅力を宣伝する案内地図を住民参加で作成する。

地域内のわらび園の活用促進	5箇所 の観光 わらび 園	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観光わらび園だけでなく、わらびそのものの高付加価値商品化</li> <li>・わらび園来訪者に別の季節に再来園してもらうための企画づくり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特産品としてのわらびのブランド化：郷土料理や薬膳料理の材料だけでなく、加工して保存のきく健康食品の研究開発など、わらびに徹底的にこだわった特産品メニューをそろえる。</li> </ul>
ダム湖周辺の水源の森	樺沢、大滝山、旧滝集落などの山林	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ダム湖周辺に分布する山林を「水源の森」として保全し、育成管理を行っていく体験プログラムの実施</li> <li>・森林を適正に管理・経営しているという国際的評価である FSC（森林管理協議会：本部はドイツ）認証取得への取り組み。</li> <li>・企業に森づくりへの参加を呼びかける。企業は、森づくりを通して、社会貢献やCO2の削減にも貢献できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ダム湖周辺の山林をフィールドとして、水源地域の森林が有する機能を学び、その機能を発揮するために必要な管理方法を体験できる場を設定する。</li> <li>・同時に棚田を含めた里山の復元や、里山の多様性を実感できるエリアを、農家民宿などとともに里山野外博物館として位置付ける。</li> <li>・水源地域の森や水田の保全は、下流域の住民の生活に直結するだけでなく、海の魚場の保全にもつながることから、この活動を流域全体との交流事業に育てていく。</li> <li>・まず、町有林において FSC 森林認証を取得し、持続可能な社会を目指す活動団体や企業と連携しやすい環境づくりを行っていく。</li> <li>・参加企業と協定を結んで、継続的かつ多様な交流に結びつける。</li> </ul>
町内他地区への好刺激の伝播	町内南部、中心部、北部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・横川ダム建設にあたって、調査編集された「横川ふるさとへの想い」によって、これまで埋もれていた多くの地域の歴史や民俗文化が再認識された。町内の他の地域でも、地域固有の歴史文化を見直す良いきっかけとなって波及している。</li> <li>・横川ダム水源地域ビジョンへの取り組みが、まちづくりにおいて、官主導から民主導へとシフトしていく新しい取り組みが始まっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域づくりへの取り組みの普遍性が、横川ダム水源地域ビジョンの取り組み（講演会やワークショップの開催など）を通して、町内に広く伝わり、他地区での新しい取り組みに発展していくきっかけになっている。</li> <li>・横川ダム水源地域ビジョンへの取り組みによって、多様な人材の発掘や、まちづくりに関する NPO 活動の情報も集約化されるようになり、町全体の今後のまちづくりに対する段階的な向上への筋書きが描きやすくなった。</li> <li>・まちづくりの活動団体の連携や役割分担がしやすくなり、それぞれの地域を超えてテーマ性によるネットワークが可能になってきている。</li> </ul>

#### 4-1-5 町全体あるいは町域を超えた流域交流の視点

本町の拠点整備地区の一つである、湖畔の森ふれあいゾーンは、第4章の冒頭に述べたように、他の拠点地区と連携しながら段階的な向上を目指すまちづくりの5つの柱の一つとして位置付けられている。したがって、全体のまちづくりの視点が必要であると同時に、町を代表する重要な拠点の一つとして、町外、特に下流流域の安全を守る役割の大きいダムという機能からも、下流流域全体の地域との連携交流は、意義あるものと考えられる。

そこで、表4-5に、町全体あるいは流域全体の中での交流の視点について事例的に整理する。

表4-5 町全体あるいは町域を超えた流域交流の視点

連携の視点	町全体の拠点間交流	流域全体の連携交流
活動のネットワークに関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本町では町全体の自然や歴史文化環境を学習の場として位置付け、拠点ごとに活動を展開している。本地域が有する学習機能の潜在性も高く、既に、叶水のビオトープを会場に環境学習の支援が横川ダム工事事務所やNPOの手で行われている。今後、それぞれの拠点が有する特徴を活かした展開が重要であり、そのための情報共有や相互協力は不可欠である。</li> <li>・町にとってダム湖の有する拠点性は大きく、新たに増加するであろう来訪者を、町の他の拠点地区へも誘導したり、繰り返し来訪してもらうための戦略が必要で、そのためにもそれぞれの拠点間の協働と競争によるグレードアップを図りたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・下流部の新潟県関川村に大石ダムや荒川水辺プラザ「川の資料室」があり、荒川及びその支流に関する直接的な情報のネットワーク化を図ることが可能である。</li> <li>・また、大石ダム下流には県民休養地としてレストハウス、バーベキュー広場、小動物園などがあり、ダム湖周辺利用の先進事例ともなっている。これらの地域との連携による関連企画の同時開催などが活動として考えられる。</li> <li>・羽越水害を体験した荒川流域の住民は、水害の防止に関して県や市町村という区域を超えた一体感がある。</li> <li>・越後と米沢を結ぶ旧街道の歴史からみてもこの地域は深い関係があり、越後側からは塩、小国側からは青苧が運ばれるなど、重要な物流街道であった。街道をテーマとした連携協力は、現在も大里峠で行われているが、さらに活動を広げていくことが望まれる。</li> </ul>
人的交流に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各拠点における環境学習等に関する指導者は、その地域密着型の人たちや、地域にこだわらず一定の専門性を持って全国さらには国外にも活動の場を展開する人たち、逆に町外の人たちが町内を活動の場として利用している場合など多様なケースがある。これらあらゆるケースで町の資源とかかわる人たちの情報を集め、連携や交流ができれば町の大きな財産になる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昔から新潟県の関川村とは人的交流も多く、小国町への観光入込み客をみても新潟県側からが多い。</li> <li>・水害の防止や水源涵養など下流域の人たちの生活の安全・安心に直接的にかかわるテーマから、長い歴史のある生活文化に関するテーマなど、流域間で共有できるテーマは多く、今後は単なる観光交流から一歩進めた人材や、多様な企画の取り組み団体相互の交流に発展させたい。</li> </ul>

## 4-2 多面的交流事業の推進等地域活性化のための人材育成と確保

### 4-2-1 ダム湖上流地域の地元住民の意見

横川ダム湖周辺地区、特に上流域に位置する叶水地区を中心とする6つの集落は、ダム建設によって、生活、産業、集落機能などに多くの影響を受けている。

今後これらの変化をまちづくりに、より効果的に転換して地域活性化を図るためには、将来を担う人材の確保が不可欠となる。人材の育成や確保について、また現在のダム上流地域の集落が抱える課題と将来の方向性等について、従前からの東部地区在住者、東部地区への転入者から話を伺った。以下に、それらの意見の要約を示す。

#### 1) 人材育成への提案

- ・地域に残っている若い人たちと、新たに転入してきた若い人たちが、もっと情報交換して交流を深め、協働して地域を担っていく活動をする機会をつくっていく。
- ・現在、ただ一軒残った商店では、観光客だけでなく、地域の人たちが気軽に集まって交流が生れるような場として活用していく方策を探っている。特に若い人たちが新しいことに取り組む場としての活用を期待している。
- ・今がこの地域が変わっていくチャンスである。そこでどういう具体的な活動に結び付けていくかについては、これまでの長老による話し合いではなく、若い人たちの意見を聞く機会をもっと増やしていくべきである。
- ・基督教独立学園では、地域住民にも参加を呼びかける公開講演会を開催している。今後も、このような取り組みを積極的に行って、地域住民が学べる機会を増やしていく。

#### 2) 人材確保への提案

- ・一旦町外に転出した若者たちの中にもUターン希望者は多いので、その人たちが戻ってやってくれるような地域づくり、受け入れ態勢づくりが必要である。
- ・基督教独立学園は、高い理想の教育理念をもち、学生も全国から集まって来ている。この学園の存在を地域の人材確保や育成にもっと活用していく。
- ・この地区は、あまりこだわりなく転入者を受け入れてくれるし、人間関係もうまくいっている。今後も若い人たちが転入してくる可能性は十分あるので、そういう人たちを積極的に受け入れて活かしていく。
- ・学園は、特に地元で定住できる人材を育てている訳ではないが、地域の人材として育ててくれればうれしい。地元出身の卒業生のほか、何人かは戻ってきて定住している。地域の魅力が増せば当然、今後もそういう人たちが増えるはずである。
- ・農業に興味を持つ人たちを積極的に誘致すべきである。この地域は、これからも農業を中心としていくべきだと思う。
- ・Webサイトを利用して、農業希望者の受け入れを募集することも効果があるのではないか。

#### 3) 多面的事業推進へ向けての提案

- ・付替道路によって、町中心部との交通は格段に便利になった。飯豊町と福島県の喜多方方面を結ぶ道路の整備を推進し、九才峠を通過して福島へ抜けられれば、白川

ダムだけでなく、福島県との新たな交流が生まれ、交流範囲を拡大することができる。

- ・水の郷交流館を有効に活かし、ダム上流地域の活性化への牽引役的な位置付けにしていく。(そこがうまくいかないと、全体の機運が広がらない)
- ・自然の豊かさがこの地域の特徴であり、それを活かした体験交流などを推進していく。
- ・この地域の自然の素晴らしさを来訪者に体験してもらう多様なメニューが考えられる。学園としては、学外に出て体験学習を受け入れるような活動を実行したいと思っても、現在のカリキュラムをこなすのが精一杯という面はあるが、人材のネットワークを活かしてできるだけ協力していきたい。
- ・学園の卒業生も家族を連れて毎年結構多く訪れる。そういう人たちも交流の一環として楽しんで滞在できるようにしていく。

以上の結果から、この地域を活性化していく手法としては、①先人から受け継いできた自然と農業を大切に、それを生かした体験交流活動を展開していくこと。  
②ダムという新しい地域資源と地域特性を活用した働く場を創造していくこと。  
③地域を支えていく人材を確保していく上で、転入者を積極的に受け入れていくことに集約できる。

#### 4-2-2 地域活性化のための人材育成のあり方

地域活性化に関するアイデアはたくさんあっても、それを具体化していくには、多くの問題点や不確実性が常に存在する。

そのため、これらを分析管理し、運用していく人材の育成が重要になってくる。

「地域づくり」は「人づくり」と言われるゆえんである。しかし、こうした人材が、簡単に育成できるとは考えにくい。また、行政側にしてもこれまでにそのような経験はなく、まして常に異動が付きものの自治体職員では継続していくのは難しい。

このような現状と、横川ダム水源地域ビジョン策定の過程で明らかになってきた本町の住民や NPO 等の活動状況、本調査でのヒアリング結果等を参考にして、今後、地域活性化につながる人材育成をどのように実現して行ったら良いかを検討した結果を事例的に以下に示す。

##### 1) 公（官）と個（民）の中間領域における企画・経営管理能力のある専門家の支援

まず、横川ダム完成に伴う新しい環境を活用して、ダム湖周辺地域の活性化に向けて具体的な目標を定め、そこに内在する不確実性を分析しながら全体を管理し、目標とする到達点に向かわせる能力と経験を有する専門家（インキュベーター・マネージャー）を招聘して支援を受ける。この専門家は町内外に関係なく、これまで本町が培ってきた人材ネットワークを活用しながら選定する。

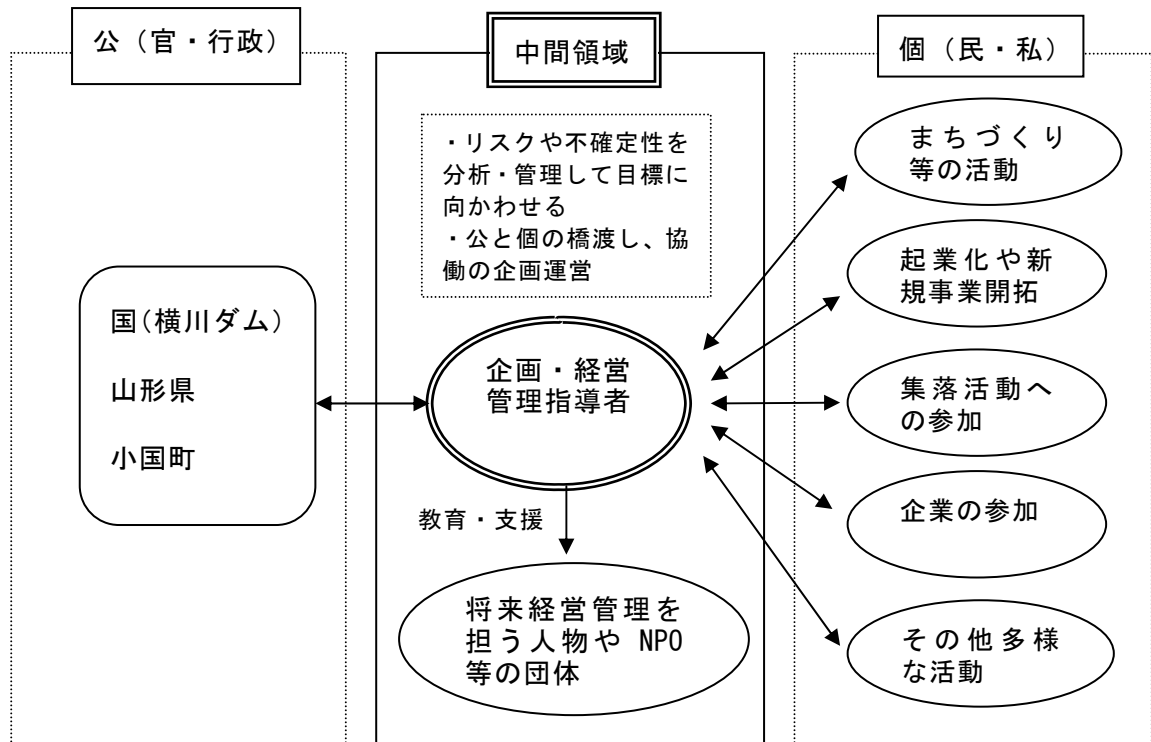


図 4-3 公（官）と個（民）の中間領域における専門家の支援の概念図

## 2) 行政頼りでもなく、個への負担転化でもなく、自律した新しい集落形成を目指した組織体制づくり

中間領域を支える活動組織が、行政組織のミニチュア版であったり、専門家集団や趣味の集まり的な NPO 団体では本当の効果は発揮できない。

指導力のある NPO 組織が、まちづくり活動の公益的な中間領域をリードしていくことは重要であるが、あくまで基本となるのは、それを支える住民一人ひとりのまちづくりへの参加である。自律した集落形成のためには、どのような地域にしていくべきかを住民自らが考え、決めていかなければならない。

そのためには、地域が自律するために必要な公益活動を理解し、地域が助け合ってきた昔の「ゆい」や「よいなし」のような共同生活の作法も、一方で見直していくことも大切である。

## 3) 目標へ向かっての活動が人を育てる環境づくり

まさに人材の潜在能力の段階的な向上を可能にする環境をいかに構築していくかが、今後のまちづくりの重要なポイントとなる。その意味で、横川ダム水源地域ビジョンへの取り組みを契機として、全ての体験が人育てにつながるような、やりがいと継続性のある活動を支えるしくみをつくっていききたい。

### 4-2-3 具体的なダム湖周辺地域活性化への人材育成と確保

#### 1) 求められる活動とそれを実施する機関や団体等の関連

まず、ダム湖周辺地域の活性化に向けて考えられる活動とそれを受け持つ機関や団体等を、現状における情報を基に表 4-6 に整理した。

表 4-6 ダム湖周辺地域の活性化に向けて考えられる活動とそれを受け持つ機関や団体等

関連する機関や団体等 活動内容	小国町	横川ダム 管理 事務所	町民	白い森大 学ワーキング グループ*	ダム上流 地域住民 や団体	ダム下流 流域の住 民	NPO 等のま ちづくり活 動団体
イベントの企画運営	○	○		○	○		○
広報交流館の運営	○	○					○
水源の郷とレストランの運営	○				○		○
郷土料理の開発			○	○	○		○
特産品開発				○	○		○
民話の伝承	○		○	○	○		○
共生の知恵伝承	○			○	○		○
水辺環境の体験学習	○		○	○	○		○
ダム湖周辺整備区域の維持管理	○	○			○		○
ダム湖の環境保全活動	○	○	○	○	○	○	○
変動水域の緑地化	○	○	○	○	○		○

この表からも、4-2-2 に示した中間領域にあたる「NPO 等のまちづくり活動団体」の役割が大きいと言える。

## 2) 人材育成の行動計画

将来に向けてのまちづくりと地域活性化実現のためには、表 4-6 におけるそれぞれの活動を実行するために必要な人材と、これら多様な活動を総合して地域活性化に結びつけていくための図 4-3 に示したような企画立案から全体の経営管理指導までができる人材（インキュベーター・マネージャー）が必要になる。

町やダム管理事務所の職員は配置換えや転勤が避けられないため、継続的な活動を総括していくことは難しい。

そこで、まず民間から常駐でなくても指導を受けられる指導者を選任する。そして、例えばほとんどの活動計画に関係しそうな地元の NPO 団体を軸とした活動を誘導しながら、地元の経営管理指導者を育てていく。

さらにその人材が、町内の「白い森の国ふるさと文化村づくり」の各ゾーンでも、図 4-1 に示すような戦略的なまちづくりの指導者として活躍し、未来の小国町を目指して段階的に向上していくための原動力となっていく。

これがすなわち、横川ダム水源地ビジョンを契機とした活動が、小国町のまちづくり戦略上大きな推進力となることを期待している所以である。